

知識構成型ジグソー法を用いた「古典探究」の授業実践

東京都立白鷗高等学校 村田 隆太郎

何するもので、古典探究？

二〇二二（令和四）年より新学習指導要領が実施され、今年度より「論理国語」「文学国語」などの新科目の授業が始動した。そのなかのひとつに、この「古典探究」という科目がある。

勤務校では高校三年生を担当することが多かったが、今年度はこの「古典探究」を担当することになった。本稿では、あれこれと思索しながら行っている日々の授業実践の一端を書き記していく。不勉強な部分もあるかもしれないが、ご笑覧賜れば幸いである。

さて、生徒も教員もはじめて触れるこの「古典探究」という科目は、そもそもいかなる性質を持つものなのだろうか。

学習指導要領（平成三〇年告示）によれば、その目標として

(1)生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

(2)論理的に考える力や深く共感したり豊かに

想像したりする力を伸ばし、古典などを通して先人のものの見方、感じ方、考え方の関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

(3)言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わりとうとする態度を養う。

という三点が掲げられている。また、これらの目標を達成するための言語活動例としては、古典の内容や形式について疑問に感じたことを調べて発表したり議論したりすることや、同題材の複数の古典作品を読み比べ、共通点や差異について論述したり発表したりすることなど七項目が挙げられている。以前の学習指導要領（平成二〇・二一年改訂版）における「古典B」の言語活動例が四項目しか挙げられていなかったことを踏まえると、「古典探究」への移行に際して、言語活動の充実を図ろうとしていること

は明確であろう。これは、先に掲げた「古典探究」の目標(1)に挙げられているとおり、「生涯にわたる社会生活」における知識・技能の涵養を目指していることからもうかがえる。ジャンルとしての古典にその題材を求めつつ、言語活動を通して実生活でも有用な資質・能力を育成するという点に重きが置かれているのが「古典探究」の大きな特徴のひとつであると言える。これに則れば、教科書本文に登場する古文単語や文法事項を学習し、一文一文を訳すことができるような知識の定着のみならず、思考力・判断力・表現力なども同時に育てていくことができる授業づくりが要請されていると捉えられよう。どうしたものか。

知識構成型ジグソー法の活用

「言葉を通して他者や社会に関わりようとする態度」や「伝え合う力」を育てていく、ということ考えたときにまず思い浮かんだのが、東京大学CōREF¹⁾によって提唱されている「知識構成型ジグソー法」(以下、ジグソー法とす

る)の活用であった。このジグソー法は、次に挙げるような段階を踏むことで知られる。

- (0) 問いを設定する
- (1) 自分のわかっていることを意識化する
- (2) エキスパート活動で専門家になる
- (3) ジグソー活動で交換・統合する
- (4) クロストークで発表し、表現をみつめる
- (5) 一人に戻る

ジグソー法においては、単元を貫く大きな「問い(課題)」を教員が設定し、生徒一人一人はそれに対して思いつく回答を用意する。その後、「問い(課題)」を解決するために用意された複数の資料をグループで読み、その資料の「エキスパート」になる。違う資料を読んだエキスパートたちがそれぞれの資料から得た知見に耳を傾け、「問い(課題)」への答えを改めて考えていく。このような過程を踏むジグソー法は、他者との関わり合いを通して一人一人が学びを深めるために最も適した方法のひとつであろう。そして、これはまさに「古典探究」の目指すところのひとつである。「言葉を通して他者や社会に関わり合うとする態度」や「伝え合う力」を育てていくことに直結するものである。いくら能力に優れていても、他者と積極的に交わることをしなければ、ジグソー法を用いても成功しえない。また、与えられた資料をいくら鮮やかに読み解けたとしても、それを他者に的確に伝えることができなければ、自分の学

びも他者の学びも深まることはない。学習者一人一人が、自身と他者の学びに責任を負うジグソー法を通して、より深く古典の世界や奥深さ、そして古典に描かれた当時の人々の見方や考え方に触れることができるかと確信した。

「能は歌詠み」と歌徳説話と単元づくりと

さっそく、四月当初から、ジグソー法を用いた「古典探究」の単元づくりに取り組んだ。今回、ジグソー法を用いて学習する教材文は、『古今著聞集』にある「能は歌詠み」に決定した。橘成季によって編纂された説話集である『古今著聞集』のうち、「能は歌詠み」と称される説話は、「和歌第六」に収載されている。この物語は、源有仁の家に参上した侍が自身の特技を「和歌」であると記載したところから始動する。初秋のある日、格子戸を閉めよと命じた有仁のもとに参上したその侍は、「汝は歌詠みな」と声を掛けられ、鳴いていた「はたおり」(キリギリス)で一首詠むように命じられる。初句「青柳の」と詠みかけると、その季節感のズレから有仁邸の女房から笑われるものの、有仁が最後まで侍の和歌を聞いたところ、その素晴らしい出来に感嘆し、直垂を褒美としてお与えになる、という梗概である。分量も決して多くはなく、物語の筋も理解しやすい教材であると言える。さて、この教材文を見たときに真っ先に想起したのは「歌徳」という語であった。

『古今和歌集』仮名序においては、「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むる」と書き表されていることでも知られる「歌徳」であるが、登場人物が和歌を詠むことで、その後の物語展開を優位に運ぶという話型を持つ説話は、なにも『古今著聞集』に限らず、同時代に成立した説話集には多く見られるものである。ここで、「物語における和歌の機能とは、どのようなものだろうか」という大きな「問い(課題)」を設定し、その「問い(課題)」の答えを、「能は歌詠み」本文以外の歌徳説話を読むことによって発見するという授業のフレームに思い至った。その際、複数の歌徳説話を用意し、それぞれをエキスパート班で読み深め、ジグソー法を活用できる点も大きな利点であった。今回は、生徒たちにも聞き馴染みがあった、第十「才芸を庶幾すべきこと」に多くの歌徳説話を収録している『十訓抄』に題材を求め、エキスパート班に与えることとした。生徒の現状を踏まえ、およそ一回から二回の授業で十分にストーリーを追いかけることができるような説話を探し求めた結果、以下に挙げる三つにたどり着くことができた。

A 能因法師の祈雨の歌(十ノ十)

B 小式部内侍、和歌で本復(十ノ十四)

C 藤原惟方の流罪(十ノ三十五)

それぞれともに和歌によって登場人物が何らかの利を得るといふ筋書きになっている。Aは、能因法師の和歌によって早魃地帯に雨が降るようになった話、Bは病床の小式部内侍が和歌を詠んだところ神に認められて快復する話、Cは藤原惟方が和歌によって赦免され流刑の地から帰還する話である。いずれにおいても、文脈をしつかり踏まえつつも手早くかつ技巧的に詠まれた和歌が、物語を好転させるための機能を有することを掴むには適しているものと判断した。

また、それぞれ和歌によって好転した後の展開も、降雨・快復・釈放と異なっており、具体的な各説話の内容を「物語の好転」というかたちに抽象させる活動することも可能である。以上を踏まえ、「歌徳説話」探究の単元を構成した。

授業の実際

本単元は八時間構成とし、第一時から第五時までを「能は歌詠み」の読解に充当した。残りの三時間でジグソー法に基づく活動を展開し、「物語における和歌の機能とは、どのようなものだろうか」という大きな問いについて自身の考えを深める時間とした。

①第一時から第五時

まず、実際の読解を開始する前に、本単元の「問い（課題）」であるところの「物語にお

ける和歌の機能とは、どのようなものだろうか」を提示し、生徒個人で考えさせるところから読解を進めていった。

担当している高校二年生・文系の四〇名は、授業内での発言を積極的に行う者や、教員の発言にしつかり耳を傾けてノートを見やすく仕上げる者が多く、授業に対する姿勢は概して真面目であると言える。また、勤務校は中高一貫校であり、日本の伝統文化理解教育を推進している。そのため、附属中学校から進学してきた生徒は、中学時代には百人一首の暗誦や教科書作品以外の古典作品の味読などを通して、古典そのものや、そこに表れる見方や考え方に触れる時間を多く設けてきた。しかし、推定の助動詞の訳出に際して「……だろう」といった推量の助動詞の口語訳が出現していたり、反語の訳出において「いや……ではない」の部分を省略してしまっていたりと、主に文法事項の理解やアウトプットにおいて課題が残っているのが現状である。そのため、生徒の反応を見ながら文語文法の補助教材を活用し、正確な知識を身に付けることを念頭に置いた。

ただ、文法・単語・訳出という点のみにこだわっているのは、次第に古典に対する興味が減殺されてしまう懸念もあった。そのため、たとえば寝殿造の様子や登場人物の紹介、飛んで行く雁の写真などの視覚資料をPowerPointのスライドに多く盛り込んだり、逐語訳を紹介すると

ともに現代の言語感覚に沿ったかたちで噛み砕いた訳出を紹介したりと、ジグソー法を用いた活動までに意欲がそぎ落とされることのないように配慮した。また、「能は歌詠み」本文には「青柳のみどりの糸をくりおきて夏へて秋ははたおりぞ鳴く」と「春霞かすみて往にしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に」という二首の和歌が登場する。特に前者の和歌には「繰る」「繰る」「はたおり」といった「糸」の縁語が含まれていたり、「へて」が「繰て」と「経て」の掛詞になっていたりと、和歌の修辭法が多分に含まれている。そのため、掛詞の説明には「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」（小野小町）を、縁語の説明には「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」（藤原公任）をそれぞれ用い、生徒にとって聞き馴染みのある『百人一首』から修辭法の具体例に触れられるように留意した。

以上、本文の読解に際してはいたってオーソドックスに、そして古典常識などを視覚的に理解できるように工夫を施して進めてきた。

②第六時から第八時

ここから、ジグソー法を用いての協働学習がスタートする。まずは三人のグループを組み、各人にA・B・Cのアルファベットを振り分けるように指示をした（ジグソー班）。そして、

同じアルファベットの者同士を集め、その中で三人〜四人のグループを組ませた（エキスパート班）。Aを選出したグループには、先述した「能因法師の祈雨の歌（十ノ十）」を、Bには「小式部内侍、和歌で本復（十ノ十四）」を、Cには「藤原惟方の流罪（十ノ三十五）」を与え、各グループで読解ならびに「能は歌詠み」との共通点や差異をまとめさせるエキスパート学習に入った。その際、一人一人がその資料の専門家となって自力で説明できるようにならねばならないということを強調し、各自が責任をもって活動にあたるように指示をした。その甲斐あってか、生徒たちは自力で補助教材やタブレット端末を駆使し、未知の語句や文法事項について調べ、その成果を共有しながら読解を進めていた。その間、教員はエキスパート班のなかを巡視し、話し合いや読解が円滑に進んでいない班に向けて助言や軌道修正を行った。

このエキスパート活動を第六時・第七時の二時間を掛けて行い、第八時には当初に組んだジグソー班に戻り、それぞれの学びの成果を二時間で共有させた。それぞれが読解した説話の内容や、「能は歌詠み」との共通点・差異について自分たちの言葉で話させたのち、ジグソー班全体で再度「物語における和歌の機能とは、どのようなものだろうか」という問いに立ち返らせた。ジグソー班で意見をまとめさせた後に全体で共有し、最後には一人一人の考えを書かせ

たところで、「歌徳説話」という枠組について教員から説明をし、この単元での学習を終了した。エキスパート班、ジグソー班それぞれの解散に当たっては、必ず拍手を送り合い、それぞれの健闘をたたえ合うこととしたため、終始なごやかな雰囲気での学習活動となった。

生徒たちの反応

ジグソー法を用いての協働学習終了後には、Microsoft Formsを用いたリフレクションアンケートを実施した。担当していない他のクラスにも協力を呼びかけ、六七件の回答を得た。設問は以下のとおりである。

- (1) 探究協働学習に主体的に取り組むことができましたか？
- (2) 自分の考えや意見を他者に伝えることができましたか？
- (3) 他者の考えや意見に耳を傾けることができましたか？
- (4) 探究協働学習を通して「能は歌詠み」本文や歌徳説話についての理解が深まりましたか？
- (5) 探究協働学習を通しての感想などあれば教えてください！

設問(1)から(4)までは、「できた」「まあまあできた」「あまりできなかった」「できなかった」の四段階で自己評価してもらった。その結果、設問(1)から(4)までにおいては、どれも九五%以

上の生徒が「できた」「まあまあできた」を選択しており、自由記述形式の設問(5)においても「初めて班活動しながら古文の研究をしてみ、自分たちで古文を解説していくことがとても楽しかった」「教科書を見て内容を理解するよりもすでに理解している人が口頭で伝える方が当然わかりやすく、さらに相手の考えも知ることができたため自分の考えを深められる良い探究の時間となった」といったフィードバックが見られた。なかには「中3のときにやった『古今和歌集』の言の葉は心を動かすことができるということに繋がっていることにとても興味を持った」と、過去の学びと関連付けて理解を深めている生徒も散見された。概して、古典作品に対する興味関心を惹起し、「伝え合う力」を涵養できる単元となった。

おわりに

言語活動の方略が広く知られるようになり、実に多様な授業実践が見られる昨今、着実な教材研究とそれに基づく挑戦が、いわゆる「新カリ」攻略のカギであると感じた。今後も、生徒たちの資質・能力をさらに育てていけるような授業・単元を組み立てていきたい。

* 本稿の『古今和歌集』引用については、『新編 日本古典文学全集』（小学館）による。